

大地と共に(下)

川上 美子

三、目ノ越子ども会について

(一) 動機と発足

目ノ越子ども会の世話人をされた松島さんは、記念誌の中に、その発足と動機について、

「入植以来毎日の過重な労働の中でも心ある人々は、なんとか機会を作り子ども達と共に遊び話し合うよう心掛けてきました。三十一年に六人で、農村生活、農業技術、社会科学等学ぶ会を作り、自分達も学ぶと共に、毎月一回目ノ越の子ども達を集めて、紙芝居、人形劇、お話し会、遊戯等を見せたり共に遊んだりしました。」と書いておられる。また、

「広い土地に家が点在する目ノ越では、子ども達は遊ぶ仲間も限られ、両親も多忙でかまっていられないどころか、中には忙しい時学校も休ませ野良仕事の手伝いや、小さい弟妹の子守りをやらされたので、自然に長期欠席する子、友達付き合いの出来ない社交性に欠ける子、時には学校生活にも、家庭生活にもついていけず、内向化する子もありました。真に開拓を成功させるには、そ

の地域全体が、経済的にも社会生活の面でも深く根付き、色々な社会の変化にも動揺せぬ人生観と、強い精神力を持ち、子ども達も喜んで後を継ぎ平和な農村生活を営みながら、社会に役立つ人物が多く輩出されるようにならなければ、その開拓が成功したとは言えません。いかに経営拡大を図り経済的に豊かになっても、子ども達が目の越を嫌って農村生活を継続出来なかつたり、後を継いでも自分の事のみしか出来ないのであれば、それは砂上の楼閣でしかなく、くずれてしまいます。」との指針に基づいて、十勝沖地震の際全国の子ども会より戴いた見舞い金を基金に、昭和四十三年に子ども会が発足した。

(二) 目標と方針、活動内容

- 一、みんなとなかよくする子ども
- 二、きまりを守れる子ども
- 三、進んで勉強しよい遊びを選べる子ども
- 四、自然に親しみ恵みに感謝できる子ども



▲ 子どもの会みんな 右上 O先生、左上 松島さん

五、助け合い協力できる子ども

この五つの目標と方針のもとに、精神的なお話、自然観察、読書活動、スポーツ、レクリエーション、奉仕活動がされた。「はまなす」(実践記録Ⅰ)に、これらの活動内容の経緯が書いてある。

(1)精神的なお話について

「子ども会を通じて、子どもたちのお話や、争い、主張を見たり聞いたりして、それぞれ家庭事情もちがうが、何が正しいことで、どういうことはしてはいけないか、本当に美しいこととはどんなことか、どういう言動が人間としてみにくいいけないことか、そして、どのように人間として真実に生きるべきかと、精神面のお話も取り入れるべきだと痛感しました。それで、野辺地教会Y牧師が来て下さっています。」

(2)読書活動について

「Y先生より児童用雑誌をいただき、子どもに自由に読ませましたところ、夢中で見たり読んだりしている姿を見て、是非読書活動を取り入れたいと思い、公民館の

本、県立図書館の本をお借りしました。」

(3)自然観察について

「昭和四十五年に、むつ小川原巨大工業開発構想が打ち出され、地価が高騰し、自然が破壊される可能性が出て来ました。目ノ越に生まれ、目ノ越を故郷とする子どもたちに、自分たちの生まれ育った踏みしめている大地が、いかに素晴らしい自然で自分たちを支えてくれているかを学ぶように、積極的に自然を知ることを始めました。自然をじっくり観察し、美しい中にもきびしく調和された摂理を学ぶことにより、人間はどう生きるべきかを、自ら体得してもらいたいと思います。」

野鳥、小動物、魚貝、植物、昆虫の五つの班を作り、生態観察、昆虫、植物の採集標本作り、当時小学校のO先生が指導して下さいました。」

(三)「はまなす」

この実践記録集に、子ども達の作文と絵がのっている。自然観察文は、子ども達が自然の不思議さに心を引

かれ、それを探究しようとする姿勢が表れている。年を重ねるにつれ、「自然を観察する真剣な態度、鋭い確かな目も育ち、自然から物事を順序だてて考えて行こうとする態度を学んだ。」と、指導されたO先生も書いておられる。私も読ませていただき、小学生がこんなに詳しく注意深く観察できるものかと、その内容の高度さに驚かされた。

昭和四十八年度に、自然観察版画カレンダーが活動の中で作られた。生き生きと力強く、力作、大作(30cm×54cm)ぞろいだ。裏表紙に、次のような文章が書いてある。

「子どもたちはこのカレンダー製作を通して、主題を決め、内容を構成し、仕事を分担し、下絵を書き、版を彫り、流れ作業で刷り上げる。この一連の仕事の中に子どもたちが一つの目標に向かって生き生きと活動し、お互いに認め合い、励まし合い、遅れている者には力を貸し、……それぞれが一つの大きな歯車を回す小さな歯車となつて、個と個が、個と集団の中でお互いを信じ固い

◀ 版画カレンダー「自然観察 野鳥」中二作



協調性が培われ、大きな自信が子どもたちに身についたと思う。」

四、四十数年の歩みを経て

「目ノ越に生まれ、目ノ越を故郷とする子供たちが、ふるさとを誇りとし、親たちの苦難をのりこえ、酪農の

跡を継いでくれるようになりました。後継者の会も組織され、酪農経営と自治会活動を支えてくれるようになりました。私たちの集落には嫁不足の問題は全くありません。」と、松島明美さん（松島夫人）は、全国農業コンクール発表原稿の中で語っておられる。

事実、多くの子ども達（子ども会で育った子ども達）が立派に後を継いでおられる。「開拓の成功と発展は、



▶「わらびひとり」絵・字 五年作

喜んで跡を継いでくれる後継者が育った時」という目標が、三十年、四十年後に達成されているのである。「親から一度も後を継げと言われた事はなかったが、小さい時から牛が好きだったので自分には酪農以外の仕事は考えられず」と酪農高校で学び、北海道で働きながら乳牛改良を勉強され、目ノ越に帰って牛群改良を進めて来た人。また「手作りイカダレース」に、『遊びも一生懸命にやれなかったらやめた方がいい』という先輩の一言に奮起し、一年中イカダの事を考え、納得のイカダを作り、力のある部落の選手もそろえ、夜遅くまで海で練習をした。そして優勝できた「信念を持って、何事も一生懸命やれば、結果はあとからついて来るものだ。」と書いている人。開拓者一世（御両親）の方々の生きざまが、二世の方々に引き継がれている。若い二世の方達が、研究を重ね、力を合わせて村づくり到现在も頑張っておられる。

五、おわりに

酪農地帯の牧草地は見渡す限り一面の緑のジュータンだ。すばらしい景色である。しかし、ここに至るまで、どれだけ血のにじむような苦勞がなされてきたのかを、そこに生きて来られた方々の証言で知った時、「自然」について深く考えさせられた。私自身、山や海が好きでよく出かける。少しばかりの花や野菜作りもした。しかし私にとっては見て楽しむ、遊ぶ、味わう自然である。目ノ越の開拓者の方との出会いにより、土地を拓き耕し、食糧を得、家畜を育てる自然、生の営みとしての自然、そして人間が生きていく上で不可欠の自然のあることを知った。また子ども会の自然観察の活動により、人間ばかりではなく、すべての生き物にとっても生ける場であることを知った。私の住んでいる六ヶ所村は、核燃施設の問題をかかえている。後継者の方が、「今、我々が農業を引き継ぎ、色々学んで世界にまけない酪農経営にしよう」と前進しているが、農業に大切な土、空気、水が徐々に放射能で汚染され、長い年月、あるいは一挙に農業に適さない地帯になるのではないかという不安」と

◀ 「スキー大会」 絵・字 六年作



怒りを語っている。ほんとうに原子力燃料は必要なのか、時流に流されることなく、自然を守る、人間を守る立場で考えなければならぬと痛感した。

(はるにれの会)